

年金老人 奮戦日記

男性自身シリーズ

山口 瞳



新潮社版

年金老人 奮戦日記

男性自身シリーズ

山口 瞳



新潮社

年金老人奮戦日記

(ねんきんろうじんふんせんにつき)

男性自身シリーズ 26

一九九四年十二月二〇日発行

一九九五年一月二十五日印刷



© Hiromi Yamaguchi 1994, Printed in Japan

著者——山口瞳(やまぐちひとみ)

発行者——佐藤亮一

発行所——株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一 郵便番号 162

電話*営業部 東京(03) 3361-5211

編集部 東京(03) 3361-5111

振替*東京四一八〇八

印刷所——大日本印刷株式会社 製本所——株式会社植木製本所

*乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

*価格はカバーに表示しております。

ISBN 4-10-322639-2 C0096

●年金老人奮戰日記●目次●

平成二年

5

平成三年

27

平成四年

176

平成五年

324

装帧・カット
柳原良平

年金老人奮戦日記

男性自身シリーズ
26

平成二年

紅茶の珈琲

十一月十三日（火） 晴

日本橋丸善でバジャマを買う。これは来月人間ドックに入るため。四階の理文路で珈琲、妻は和菓子セット。高島屋でベルト（恥ずかしながら太ってベルトが切れた）、妻は前から欲しがっていたジョージ・ジェンセンのイヤリングを買う。ベルトは上等だと成金趣味になるので安物で丈夫そうなのを探す。僕が盛んに仕事をしていた頃、妻はジョージ・ジェンセンの葡萄の形をしたブローチを買った。いつかお揃いの葡萄のイヤリングを買おうと思っているうちに貧乏になってしまった。「なんとかするから思い切つて買いなさい」と僕は言った。こういう買い方では妻はあまり嬉しくはなからうと思う。高島屋の脇の壺中居で竹中浩さんの展覧会が開かれている。もう十回目になる。格段

に絵が上手になった。壺でも徳利でも安定感があつて、少しの揺るぎもない。すっかりいい気分になって松屋裏の鉢巻岡田へ行った。ガンモドキと春菊の煮物が絶品だった。

十一月十四日（水） 晴

信じ難いような快晴続き。矢野誠一さんの『落語讀本』（文春文庫）をやつと読み終つた。ずつと以前に頂戴したもので、なぜこんなに長くかかったかというところ、便所の棚に置いて上臈するたびに少しずつ読んでいたからである。ずいぶん失礼な話だと思われるかもしれないが、小出楯重や鍋木清方の随筆といったような、好きな書物は、ゆっくり読みたいので便所の棚に置いてある。矢野さんのこの書物は、洒落だと思われる辛いが蘊蓄というものの有難さ面白さを堪能させてくれた。つい最近、同じ文春文庫で将棋の木村義雄十四世名人の『ある勝負師の生涯―将棋一代』が出たのを知ったときは嬉しかった。これは僕の若い

時の愛読書であって、稀に見る名文だと思っている。僕はこの本で文章を勉強したような気がしている。木村名人は落語の好きな人で、ずいぶん寄席通いをしたらしいが、この落語の下地が、そう言っちゃ失礼だが、小学校もろくすっぽ出ていないような人に名文を書かせてしまうのである。

十一月十五日(木) 晴

竜王戦第四局。これまた名局であって、この将棋の解説は対局者本人でなければ不可能であるように思われる。なによりも将棋に立ち向う真摯な態度が清々しい感動を呼ぶ。

十一月十六日(金) 晴

新発売の「紅茶のウイスキー」というのがよく売れているそう。少し前に「紅茶のチョコレート」というのがあって何だか変だなと思った。もう、こうなったら、日ならずして「紅茶の珈琲」が発売されることになるだろうと僕は確信している。

十一月十七日(土) 晴

依然として朝夕ヒンヤリとして日中は無風で暖いという夏の軽井沢に在るような陽気が続いている。有難いのだが、こんなに続くと何か薄気味わるい感じにさえなってくる。

府中JRA。山縣慎司氏、渡辺城次氏が来る。帰りに山縣さんとそば、芳で湯豆腐。半袖シャツだけでいいというのが不思議。

十一月十八日(日) 曇

府中JRA。展覧会の終わった竹中浩さんが競馬場へ来る。拙宅に寄らず電話も掛けず、いきなり競馬場ゴンドラ15号室に直行したというのは、いかに僕の競馬好きが浸透しているかの証左を示すもの。竹中さんは僕の選馬眼(馬を見る目)を信用している数少ない人の一人。また竹中さんに教えた馬券は妙に的中するのである。

「今日は、いいのがあるんですよ。第十一レースのアルゼンチン共和国杯まで待っていてください」と竹中さんに言った。

第十一レースに出走するバソドラードという馬を僕は狙っていた。九月の末に馬事文化賞の仕事で中山JRAに行ったとき、バソドラードという馬が実に強い勝ち方をした。九十九里特別というハンデ戦に出走したのであるが、距離二千五百メートル、ハンデ頭の五十七・五キロを背負って、一番人気、これが大きく出遅れるのだが、直線で馬群を割って先頭に立つや、あとは離す一方の大楽勝、時計は二分三十四秒〇、推定の勝ちタイムより二秒ばかり早い。この

夏の最大の上り馬はこれだと思った。

第十一レースのアルゼンチン共和国杯にバソドラードが出てくる。このレースの推定勝ちタイムは九十九里特別と同じ二分三十四秒〇であって、むしろ距離は二千五百メートル、ハンデ戦であって、こんどの負担重量は三・五キロ軽い五十四キロ、騎手は若手ナンバー・ワンの柴田善臣である。これなら負けようがないと僕が思ったとしてもおかしくはないだろう。

バドックで見ると気配は悪くない。馬体重四キロ増で、中山で見たときに較べると心もち張りがいい。しかし、僕は勝てると思った。バソドラードは馬番は九番であるが連勝式の枠順は五枠である。ところが、馬番が八番で同じ五枠のメジロモントレイの馬体が更に素晴らしい。休養あけ二戦目で、前回三十四キロも馬体が増えていたのに今日は十四キロ減である。穴党なら絶好の買い目だと思うだろう。

僕はバソドラードの単勝を四千円、メジロモントレイの単勝を千円、⑤⑤の連勝式を二千五百円買って部屋に戻った。なぜメジロモントレイの単勝をもっと買わないのかと言われそうだが、気を入れている馬がいると、他の馬はそうは買えないものだ。また、僕は健康とボケ防止のために競馬をやっているの、いくら気が入ってもそうはたくさん馬券を買わない。

「⑤⑤の馬券を買ってくださいよ。バソドラードは負けませんよ。同枠のメジロモントレイは馬体が素晴らしい。殆んど⑤⑤できまると思っています」

そう15号室の面々に言った。竹中さんはバソドラードの単勝を一万円買い、⑤⑤の馬券を二千円買った。妻は⑤⑤を五百円買った（最終オッズバソドラードの単は六・四倍、メジロモントレイの単は二十二・六倍。⑤⑤の連勝式は六十五・九倍である）。

レースは、バソドラードが果敢に中団につけ、インでぐつと我慢する形。メジロは例によって最後方。直線坂下でバソドラードは馬群を縫って先頭に躍り出た。上り三十五秒台の足を使えることがわかっていたから、もう勝ったと思った。そのとき猛然と横山典のメジロモントレイが大外から襲いかかってきた。そうして⑤⑤で他馬を引き離したのである。

「やった、やった、⑤⑤だー！」

そこからゴールまで百五十メートルばかりであろうか。その五、六秒間に僕の頭は配当金を計算していた。妻が約三万三千円、竹中さんと僕が約二十万円。嘘だと思われるかもしれないが、僕はその五、六秒間で妻にジェンセンのネットレスが買ってやれるぞなんて考えていたのである。ところがメジロモントレイにびったりと喰いついて離れな

い馬がいたのである。リアルバースデーだ。長い写真判定の末にメジロ、リアル、パソドラの順となりパソドラの単と⑤⑤の馬券は消えた。僕はリアルバースデーの馬主である映画監督の森田芳光さんのところへ行つて「少しは遠慮してくださいよ」と文句を言つた。「そんなこと言われたって、こつちだって一所懸命なんだから」と森田さんが笑つた。このレースの二着賞金は二千万円である。

山茶花時雨

十一月十九日(月) 曇

昨日は府中JRAのアルゼンチン共和国杯というレースでパソドラード、メジロモントレー、リアルバースデーの順で大穴になるところをリアルバースデーが二着に突っ込んできてバーになつてしまった。勝つたのはメジロモントレーである。リアルバースデーの馬主の森田芳光さんに妙なことを口走つてしまつて後悔している。僕には格というものがよくわからないで、どうしても馬つぷりと調子に重点を置いてしまう。リアルバースデーはダービー(GI)二着、京都大賞典(GII)二着だから、ここでは格上であり、ジリ足だが長距離に実績がある。メジロモントレーも

クイーンステークス(GIII)、金杯(GIII)の勝馬だから、これも格上であつて、この一、二着は少しも不思議ではない。「山口さん、今夜は眠れないよ」「⑤⑤の夢を見るよ」なんて言われたが、格の勝利だとわかつたので眠れないなんてことはなかった。

庭仕事少し。屋上の掃除。サントリー坪松氏来。『別冊文藝春秋』の随筆(二枚半)を書く。

十一月二十日(火) 曇

馬事文化賞候補作の浅川かよ子作『木曾馬ツユの手まりうた』(ほるぷ出版刊)を読む。童話を読むことなんか滅多にはないが、これは気持のいい作品で孫がいたら読んで聞かせたいと思つた。少しの厭味もなく従つて格調が高い。この作者はなかなかの手足^{てあし}れだと思つた。同じく昌子武司作『東海道を馬で行く』(文藝春秋刊)は文字通り心理学者が駄馬を駆つて東海道を旅する話だが、愉快で、読んでいて心が晴れ晴れするような思いをした。

十一月二十一日(水) 曇

フミヤ君来。彼は僕の『短篇小説全集』を編集してくれているので、その打合わせ。僕の作は小説だか随筆だかわからないものが多くて困ると言つて歎く。

十一月二十二日(木) 晴

明後日がプロ野球のドラフト会議だが、テレビのスポーツニュースなんかで見る元木大介君の顔が次第に暗くなってくるのが気になって仕方がない。若くして人生の地獄を見てしまったためなのか、あるいは悪い思い出が近づいてくるためなのか。よくはわからないが、あの晴れやかな笑顔はどこへ行ってしまったのか。大人の社会は少年の心を踏み躪るようなことをする。

生体部分肝移植の窪田嵩大ちゃん(二歳)死去。国立市富士見台の赤ちゃんなので、妻とともに手術の成功を祈っていた。まるで自分の子供か孫が死んだような気持ちになる。妻は僕に内緒で僅かだが贖金にに応じていたと言う。

十一月二十三日(金・勤労感謝の日) 晴
落葉頻り。いよいよ焚火のシーズン。

十一月二十四日(土) 晴
ようやくにして朝は寒くなった。府中JRA。小室恒吉先生の持ってこられたボージョー・ヌーボーを飲む。今年のはサッパリしていて軽い感じで美味しい。誰に何と言われようとも競馬場で飲む葡萄酒が一番美味しい。空気が

澄んでいるからだ。

ロアルド・ダール死去の報あり。七十四歳。ナイーブな感じのする作家だった。彼が勇敢な飛行機乗りだったことが信じられないような気がした。パトリシア・ニールと結婚してカーク・ダグラスが嫉妬したのは有名な話。繊細な作品を書くのに、どこかに商売上手な職人という感じもある。007のシナリオを書いたり、ベストセラーになった童話や自伝を出版したりする。すなわち一筋縄でいかない男であるが、そのへんのところも好きだった。

十一月二十五日(日) 晴

朝早く(七時半頃)、植繁の鈴木正男さんが赤米という古代の米を炊いて持ってきてくれた。それにしても植木屋というのは早起きだなあ。

府中JRA。『話の特集』の矢崎泰久さん、都鳥君、スバル君が来る。この三人がジャパンカップの日に競馬場にあられるのは毎年の恒例になった。

ジャパンカップというのは奇怪なレースである。パドックで見えるかぎり、イギリスのコーセン騎乗のベルメッツという馬が負けるわけがないように思われる。馬つづりが断然他を圧していて実績も一番いい。同じくイギリスのカヨーシーズも出来はいい。フランスのフレンチグロリー

ーもオードも素晴らしい。アメリカのブティックイル、アルワウーシュもいい感じだ。ところが、これらの馬は一着には来ないような気がする。結果は果たしてその通りで、勝ったのはオーストラリアのベタールースンアップである。毎年同じようなことが繰り返されている。コーセン騎手は「こういう結果がどうしても信じられない。やはり、馬場が合わなかったのかな」と言っているが、本当にそう思っているのかどうか。暴論のようだが、ベルメッツの関係者には初めから勝つ気がなかったように思われてならない。引退して種牡馬になることが決まっているベルメッツを日本の硬い馬場で壊してしまつては一大事である。

そこで僕はホワイトストーン（白石さんと呼んでいる）の単勝を買った。馬券的には大惨敗であつたが二分二十一秒二という好タイムで勝つたベタールースンアップから〇・二秒差の四着ということに僕は納得し満足している。何をやるかわからない外国の馬を当てずっぽうに買うよりよっぽどいい。

前記三人に常盤新平さんを加えて、そば芳で打上げ会（これで今年の府中の東京競馬が終る）。妻も息子も来たから、ちよいとした宴会のようになった。湯豆腐、山菜おろし、精進揚げ、お新香と食べるものは大体決まつている。「取敢えずルービー（ビール）だな」

に始つて、かなり飲んでしまつた。酒の害は唯一つ、酒を飲むことによつて勢いがついてしまふことだそうだが、酒の害が発揮されて、近くのロージナ茶房へ行つて、地下室にマスターの伊藤接さん（つぎ）を呼んで、またしてもボージョレー・ヌーボー、ボージョレー・ビラージュの葡萄酒大会になつた。矢崎泰久さんは酒を嗜まず、都鳥君は血圧が高く、常盤新平さんは明日が病院の検査だとかで控え目にしていたし、スバル君は「食べ役」であつて酒好きのほうではないから、飲み手は伊藤さんと僕と息子の三人である。僕は禁酒中の身であることを忘れてしまつた。いけませんねえ。

十一月二十六日（月） 晴

宿酔。ホワイトストーンで囊中（のうちゆう）スカラカンになり妻に

借りた金も返さなくてはならないので貯金箱を壊して多摩信用金庫へ持つていつて札にかえてもらう。

大学通りの紅葉（黄葉）が泰西名画のようにポーッと霞んで続いている。主として桜と公孫樹である。昼過ぎになつて麻布中学同期会の日であることに気づいたが、宿酔よりそこへ行けばまた飲んでしまふことがわかつていたので欠席する。長生（ひけい）の秘訣は義理欠く人情欠くである。

十一月二十七日（火） 曇

竜王戦は谷川が勝って新竜王。

十一月二十八日（水） 雨

初冬の長雨を山茶花梅雨と言うそうだが、山茶花時雨にしたい。徳川夢声に「山茶花の雨となりたる別れかな」という佳句がある。

人間ドック

十一月二十九日（木） 雨

昨日は吉行淳之介さんと『小説新潮』正月号の対談があった。於九段下寿司政。タイトルは「老イテ益々老碌——齒無しのはなし篇——」といったものになるだろう。吉行さんが「女の万引は許してやんなきゃねえ」と言った。女についての対談ではないので、この部分はカットになると思うが、いかにも吉行さんらしい発言だと思った。含蓄がある。この日、吉行さんは帝国ホテルの床屋で散髪してから寿司政に廻ると言っていたのに髪が乱れている。聞いてみると「床屋へ行って十日目といった感じに頭を刈ってもらった」ということだった。同行した横山編集長が頻りに頷いて

ていた。この話、嘘じゃない。また、前回の対談でお目にかかったとき肝臓が悪いと言っておられたが、それは誤診であつたそうで、かなり元気を恢復されておられることを吉行ファンに報告しておく。

そのあと、直木賞選考委員懇親会に出席するために紀尾井町の福田家へ行く。去年のこの会のあつた日の朝、開高健危篤を知らされていた。あれからの一年は、まことにアツというまに過ぎた。終つて国立に戻ってから豊田健次さんと文蔵に寄つた。

サントリー小玉文化事業部長、広報部坪松氏来。開高健文学賞のことなどを教えてくれる。慎重社フミヤ君来。

『中央公論文芸特集・冬季号』の日野啓三「東京タワーが救いだつた——腎臓ガン手術からの生還」を読む。たしか去年の七月の芥川賞・直木賞選考会の控え室で会っているはずだが少しも気づかなかつた。その直後に手術されたらしい。しかも、僕が前立腺肥大で通院している慶応病院泌尿器科で手術したのだそう。日野さんは昭和二十年代終りの頃の同人雑誌の仲間であるが、誰もが癌になつても少しも不思議ではない年齢に達してしまつてゐる。

十一月三十日（金） 雨

佐助が咲いた。山茶花はこの家でも満開で、ずっと続

いた暖かさで山茶花も拙宅の侘助も一杯に咲いてすぐに散ってしまふのではないかと思われる。

慶応病院神経内科再診。台風二十八号とかで雨激しく降る。血圧(160—80)。前回よりはいい。

妻もツキソイで来ていて、新宿区納戸町(牛込北町のそば)の弥生へ行く。慎重社N重役、スバル君と四人で会食。弥生は僕が看板の文字を書いたのだが、どういふ店か知らないで心配していた。ざっと見渡して二十坪ばかりだろうか、カウンターと小間との配置がよく、飲みたい人はカウンターで主人の顔を見ながら腰を落ちつけて、といった具合に作られている。開店したばかりだから何もかも新しく畳なんかも匂い立つようだ。器や皿の好みもいい。こういうのを、好ましい小体な店とでも言ったらいいだろうか。僕には海鼠と鯨の刺身と虎魚の鍋物が美味かった。

十二月一日(土) 晴

十二月になって台風一過もないもんだが、事実はその通りで快晴、雨戸を繰って、思わず、アツと声が出てしまった。目の前の山毛櫨の黄、それも濃いカドミウム・イエロー・オレンジといった色合いで朝日を受けている。この山毛櫨はこの日のために葉をつけたのではないかという気さえした。遠く——といったって拙宅の庭だから二十メートルもないが——ヤマボウシの赤、これはフレンチ・パーミ

リオンそのものの色で、僕の立つ位置からは透けて見えるものもある。蕾を一杯につけた椿の艶やかとしか言いようのない濃い緑の葉の一枚一枚にヤマボウシの赤が映っていて、これは無気味な感じがする。その隣のウシコロシは上品に控え目なネエイブルス・イエローといったところか。僕は、どんな平凡なありふれた風景でも、ある季節のある特定の時刻には美しく見えるというのを持論にしているが、それが自分の家の庭で実証されたような気がした。僕は、自分の家の庭で昂奮するバカがどこにいるかと苦笑しながら、中二階の寝室から一階の居間へ降りていった。

十二月二日(日) 晴

暖い風が強い。それでも庭の落葉を掃き焚火をせずにはいられない。かなりの盛大な焚火になった。

十二月三日(月) 晴

午前六時起床。徳さんの運転するタクシーで、七時十五分荻窪病院着。十二月の初めに妻と息子の三人で一泊の間ドックに入るのが恒例になっている。三人一緒に行動することはこれ以外に滅多にはない。三人一緒に病院とは妙だが、変な温泉なんかへ行くよりは病院のほうがいい。体

重測定は七〇・五キロで去年より一・五キロ増。身長は一六三・五センチで、五ミリ減った勘定。サラリーマン時代は身長は一六五センチで、それが一六四センチになったのは頭髮の關係だと思っているが、今度の〇・五センチの目減りは縮んだと思われぬ。僕はもう縮みゆく人だ。

血圧（160—80）。僕は慶応病院に通院しているのが人間ドックに入る必要がない（慶応病院で頼めば何でもやってくれる）のだが、妻が一人ではいられない一種の病人であるので、妻のツキソイでやってきてついでに診てもらっている。荻窪病院は建築以来五十四年という古い病院で、あと二年間をかけて全面改築することになっている。慶応病院と荻窪病院とを比較すると荻窪病院のほうが遥かにドメスチックな病院だという感じがある。僕は、いつでも町医者 of 医院を大きくしたようなものだと思っている。昨年亡くなった院長の吉川忠直先生とは競馬場で知りあった。吉川先生も府中競馬場のゴンドラ15号室の常連で、すぐに懇意になった。吉川先生は神様のような人柄で、誰からも親しまれ信頼されている。以前に井伏鱒二先生の盲腸を切った外科の名人だと紹介したことがある。いま息子さんの吉川忠裕先生が事務長をしているが、僕が吉川院長を神様のような人だと言うと、どの看護婦も「アラッ、忠裕先生だっ

ていい人よ」と必ず言うのである。こちらが甘えているの

だけだ、何でも頼めるような気がして、人間ドックが終ったときは、いつでも美味^{おい}しい珈琲^{コーヒー}を淹^いれてもらっている。

糖負荷試験と採血、検尿で午前中が終る。妻は安心したのか病院のベッドでよく眠る。

午後は胸部撮影、心電図、眼科診察、胆嚢^{たんのう}エコーがあった、女医の中村はるひ先生の内科診察。

看護婦というのは、早口でよく喋り、よく笑い、廊下をよく走る。この看護婦を早く新築の病院で見たいものだと思う。廊下といえ、廊下の角を曲るたびに向うから吉川忠直院長が笑いながらあらわれてくるような気がする。看護婦さんたちは「吉川院長に新しい病院を見せてあげたか」と何度も言う。

十二月四日（火） 晴

荻窪病院にいる。胃・十二指腸透視。僕は一度で終らず、もう一度。呑んだバリウムが十二指腸に降りてこないのだそう。二度目も駄目。病室でやすんで、また呼ばれて三度目でやっとOK。妻と息子はすぐに終った。僕はなんと因果な体であることかと思う。血圧（160—80）。人間ドックから帰るときは、たいいていの人は血圧があがるんだそう

中村先生の講評。尿中白血球が多い。コレステロール(265)、中性脂肪(306)、糖尿病糖負荷二時間後の数値(50)が悪い。脂肪肝も不可。食道に隆起あり、ポリプの疑いがあるので胃カメラによる再検査が必要であるという。

水 仙

十二月五日(水) 晴

JRA馬事文化賞選考委員会に出席。今日は馬事文化賞の候補作を選ぶ日であって、僕がいままで読んできたのは参考作品であつた。僕にはこの種の思い違いが屢々ある。

参考作品の書物(絵画・彫刻・映画・写真なども候補の対象となる)のなかでは大橋巨泉『競馬解体新書』(ミデアム出版社刊)が面白かつた。これはJRAや馬主会に対する挑戦状のような書物であって、これを候補としたJRAは度量が大きい。番組面に関する提案のなかで、秋の天皇賞の出走資格を四歳以上とせよというのは、かねがね僕もそう思っていたので、巨泉さんの提案をJRAが受け入れて実現したのは実に有難かつた。こういう意見を正面切つて打ちだせる人は大橋巨泉さん以外にいない。三歳以上のオール・エイジのレースというのも面白い。これは名著

だと思つてゐる。

ただし『優駿』が百万部売れる日」という章のなかで「とまれ、ボクは『優駿』の発行部数が百万を越えた時(現在約四万部)、はじめて日本に競馬が根づく時だと固く信じてゐる。」と言つてゐるのは納得できない。筆が滑つたのだらう。十年位前になるが国民雑誌といわれる『文藝春秋』の実売部数が六十万部から七十万部程度だと聞いたことがあるが、専門誌であり国営事業のPR雑誌であるところの『優駿』が百万部も売れたら、薄気味が悪いし、そういう世の中は危険だと思つてゐる。

会合から帰つてきて、「成人の日」のサントリーの広告コピーを書く。これは楽しいほうの仕事であるが、テーマが決まらないときは辛い。一人で苦しむことになる。

十二月六日(木) 晴

サンアド広内啓司氏来、「成人の日」の広告コピーを渡す。

僕等の年齢になると、入浴の際に、石鹸でゴシゴシと体を洗つてはいけないんだそうだ。皮膚の脂が無くなつて体が痒くなるらしい。いや、げんに僕も痒くなるときがある。

十二月七日(金) 晴